



## 1学期のまとめ もうすぐ夏休み

すでにお知らせしてある通り、新型コロナウイルス感染防止のための臨時休業が5月22日まであり、学年の学習内容の履修に必要な日数を確保するために、今年度の1学期は7月30日までで、夏休みは7月31日から8月19日までということになりました。



夏休みまであとわずかとなり、各学級でも、短かった1学期の総括のための学習に取り組み始めています。ここで、1学期の取り組みの成果としてうれしいことがあります。

前号で、「子どもたちのあいさつがちょっとさみしい・・・」ということを書きました。書いただけでなく、学校での生活目標として取り組んだり、学級指導の中で子どもたちに投げかけたり、さらに、学校だよりを読んでいただいた保護者の皆様のご協力のおかげでしょう、朝の登校時のあいさつがずいぶん元気になってきたように感じます。これは、私一人ではなく、ほかの先生方も感じているところです。どんな場面で、どんなふうに挨拶ができていたのかは、学級ごとに反省としてまとめをしていく予定ですが、夏休みに向けて、家庭でのあいさつの取り組みとして継続していただけると、2学期以降の元気な挨拶につながるのではないかと思います。よろしくをお願いします。

各教科の学習も、学習の区切りでのテストも実施しているようですが、今まで学習した内容が身についているかを試している（まさにテストです）わけですので、持ち帰ったテストを見ていただき、学習の定着状況を確認し、復習のための資料として活用してください。（テスト直しは、学級ごとに行うと思います）

大漁  
金子みすゞ

朝焼け 小焼けだ 大漁だ  
大羽鱈(いわし)の大漁だ  
浜は祭りのようだけど  
海の中では何万の  
鱈(いわし)のとむらいするだろう

四年生と、この詩の勉強をしました。金子みすゞさんのやさしさがあふれる作品です。見方を変えると、違うものが見えてくる。見方を変えて物事を考えてみると、今までの自分の考えとは違うことがある。そんなことに気付かされます。授業の終わりには、ほとんどの子が暗唱できるようになっていました。

エライ！

## 見られたらラッキー！ ネオワイス彗星

7月半ば過ぎから、夕方の北西の低い空にほんやりとした光の塊が見えるかもしれません。それは、「ネオワイス彗星」という天体です。彗星というと、長く尾を伸ばした天体を想像するかもしれませんが、実際には、尾まで見えるかどうかははっきりしませんが・・・

国立天文台のHPにも情報があります。計算上、次にネオワイス彗星が地球に近づくのは5000年以上先のことのように。

梅雨空が続く毎日ですが、今がチャンス。もし夕方晴れていたら、日の入り1時間くらいが見ごろのようです。彗星観察に挑戦してみませんか？



撮影日時：2020年7月7日 04時57分 (JST)  
カメラ：Nikon D7000 (ISO: 800, 露出時間: 8秒)  
レンズ：Nikon 35mm F2D (絞り: F2.2)  
撮影者：堀内真史  
撮影場所：石理天文台

国立天文台HPより引用

## 『伸びる子』の条件②

前回に続き、伸びる子の条件についてです。「勉強のコツがよくわかる本」より

### 「伸びる子」の条件2《まじめな子》

ここで言う「まじめ」とは、「勉強すること」に対するまじめさのことだそうです。具体的には「机の前に毎日座る習慣」というふうに考えます。机の前に座る習慣は、作るのに時間がかかります。まず、2年かかってできれば上等だとか。まだ習慣化されていない場合には、机で勉強させることより、目安の時間だけ机に座っておくことから始めればよいそうです。時代の違いで、ゲーム三昧になることは想定されていなかったかもしれない本ですので、座ってやるとしたら、読書、お絵かき、パズルなど机に座ってできるとよいと思います。もし、宿題や自主学習をしていたら最高です。

### 「伸びる子」の条件3《挑戦する子》

何事に対しても尻込みしないで「挑戦」していく子です。いろいろなことに手を付け、一通りのことはこなしてしまう。しかし、挑戦しても失敗することがあるので、そんな中で鍛えられ、一段と成長するというのだそうです。

### 「伸びる子」の条件4《最後までやる子》

一度やり始めたことは、「最後までやる」タイプの子です。スイミングスクールに入ったら選手コースまでやってしまったりとか、剣道を始めたら有段者になるまでやらないと気が済まないという子だそうです。そして、こういうタイプの子は、遊んだあとを見ると、一応「後片付け」までします。最後のことまで手掛ける精神があることが大切なのだそうです。

この本には、次のようにも書かれています。

「伸びる子の条件」は“備わったもの”ではなく“育てるもの”

一つでも当てはまることがあれば、あるいは近いところがあれば、そこをのばしていくことが大切なのだそうです。

\* \* \* \* \*

伸びる子の条件について考えるとき、何人かのスポーツ選手を思い浮かべることがあります。その中で、現役として活躍中の選手では、西武ライオンズの栗山巧選手（背番号1）を思い浮かべます。今シーズンも、3割を超える打率で活躍中の外野手です。（7月14日現在）

2018年の冬。あるイベントに、西武ライオンズの田邊前監督（吉田高校出身）と共にいらっしゃった後藤明美さん（元西武ライオンズ投手、西武ライオンズ若獅子寮寮長（当時））から聞いた話です。

その日、後藤さんは栗山選手のバットを持ってきてくれました。こげ茶色のバットは、“芯”（ここにボールが当たると一番飛ぶ場所）の部分の塗装が10cm程の範囲で剥げていました。後藤さんによると、2月のキャンプ中の練習で、何千球ものティーバッティングの練習でできた跡なのだそうです。ボールがこの場所にだけあたるように打つ練習をしたために、塗装が剥げてしまったのです。その精度に驚くのと同時に、やり始めたらとことんやりぬく姿勢に感動しました。

栗山選手は、「伸びる子の条件」でいえば、間違いなく④の条件を持ち合わせた人なのだろうと思います。プロ19年目。今シーズンも活躍が楽しみです。

## 北小花日記

前回の答え。昔、ガラスは日本では生産できず、外国から持ち込まれる貴重なものでした。そのガラスが壊れないように、箱の中に緩衝材（今なら、ビニールでできた「プチプチ」みたいなもの）として詰められていたのが「クローバー」だったようです。箱に詰めてあった草、ということから、「シロツメグサ」となったというのが有力な説です。今では日本各地の野原ならどこでも見かけるような植物ですが、もとは外国からやってきた草だったんですね。（「ムラサキツメグサ」という植物もどこかで見かけるかもしれません）